

## 世田谷村日記

石山修武

七月三〇日

昨夜は磯崎さんのところで藤森の巨石文化を少しばかり楽しみ過ぎた。十一時半過ぎ世田谷村発。十二時五〇分五反田TOC、トモコーポ物流センター建設定例打合わせ。十七時大学、森の学校打合わせ。その他。

七月三十一日

終日雑事に忙殺される。十八時半調布馬場さん宅。打合わせ。終了後烏山に戻り、河野君大野君等と会食。二十二時半終了。明日のNHK藤森番組取材に世田谷村が賛助出演する為に世田谷村は片付けで大騒ぎ。

八月一日 日曜日

十七時NHKTVスタッフ、藤森照信来る。藤森さんの番組に出演する。世田谷村二階で、スライドを写して、三番勝負とやらを録画した。二十二時過ぎまでかかる。異常なる大食漢であった藤森さんも、少しばかり大食ぶりが小振りになりつつあるようで、つまり常人に戻りつつあるようで、何となくホッとす。六〇才近くになってあの大食が続いているようだ、何だかあまり食べなくなっているこちらは悲しくなってしまうからな。

八月二日

十一時過ぎ研究室、森の学校打ち合わせ。十四時伊藤さん来室。十七時迄打合わせ。再び森の学校打合わせ。十八時過大学を出て、一九時過京王稲田堤、厚生館現場へ。近藤理事長、八大建設西山社長と打ち合わせ。二〇時現場を発ち、二〇時三〇分新宿へ戻り、コーヒーショップでデービッド、石井と再び森の学校打ち合わせ。二十一時半終了。二十二時、世田谷に戻り、今日初めての食事。飯位キチンと食べたい。

書評

「高山建築学校の伝説」

伝説などという、いささか実態よりも過大な書名が附されたこの書物は、一九七二年に飛騨高山の数河峠を起点に運営された、建築家倉田康男を校主とする私塾の記録である。

今も、姿形を変えながらこの私塾は開催されている様だが、校主・倉田康男はすでに亡く、私の考えでは関わってきた主要と思われる人間の大半は故人となった。教師陣で生きて動いているのは哲学の木田元先生と、建築史の鈴木博之、そして私くらいなものだろう。

虎穴に入らずば虎児を得ず、のことわざがあるが、この私塾はバタバタと教師が亡くなる経過を見つめる限りは、墓穴を掘らずば本性も視えず、の感がある私塾であったのが良く解るのが、この書物の功績であろう。特に倉田康男の姿形はこの書物によって初めて明らかになっている。人間は、死んで初めて姿形がハッキリする。三〇年経って視えてきたのは、七二年開校の高山建築学校も又、一九六八年の騒乱、異議申し立ての重大事件の明らかな産物であった事である。

ありとあらゆる事件、出来事には歴史的連関があり、関数が働

いている。その事実が鈴木博之、木田元へのインタビュで浮き彫りにされている。しかも具体的に。高山建築学校という小さなドキュメントが一九六八年という近代と現代の境界の時を視えるようにしている面白さがある。一九六八年は近代の終わりを知らせる変革の年であり、その余震はいまだに続いている。